

第33回 市民環境問題講演会「これからのごみ問題」・報告と感想 (DVDで見 て)

宮入容子

主催：「たまあじさいの会」／ 共催「日の出の森・支える会」・「日の出の森・水・命の会」
(2024・4・7 於：羽村市生涯学習センター ゆとろぎ 小ホール)

●第1部 基調講演 中里唯馬（なかさと ゆいま）さん

〈プロフィール／1985年生まれ。小学校の頃父に連れられ、二ツ塚処分場予定地にあったトラスト地をたびたび訪れる。／2008年、ベルギー・アントワープ王立アカデミーを卒業。／2009年、「YUIMA・NAKAZATO」を設立。／2016年からパリ・オートクチュール・コレクションに公式ゲスト・デザイナーとして参加している。日本人公式参加は森英恵さん以来2人目。(講演会チラシより)〉☆筆者補足～トラスト地に立てられた「風の塔」の製作者は中里さんの父親、造形作家の中里絵魯洲さんです。

高校卒業後、ベルギーのアントワープで4年間、ファッションデザインの勉強をし、個性を引き出しながら自己とは何かなどをトレーニングしてきたという中里さん。衣食住の中で「衣服」をまとうのは人間だけ。また、数十年前は衣服は家庭内で作られていた。近くの人が作ると、物のありがたみがわかる。一度オーダーメイドで服を作った時、着る人が喜んでくれて、作り手として嬉しかった。ということで、「一点物（オートクチュール）に賭けてみよう」「一点物を発表するのはパリしかない！」とパリコレに飛び込んだそうだ。

しかし一方、世界中で作られた服の75%が廃棄されていることに心が痛む。デザイナーとして、廃棄現場を見ておかねばと、アフリカ・ケニアに向かったのが、2022年秋。現地は焼却炉がなく、破棄された衣服でごみ山と化し、とてつもない異臭と太陽光で燃えている焦げくさい臭いが充満していた。衣服ゴミは積もって道となり、衣服道を歩けば奥に川。その川も衣服だらけで墨汁色の川が流れ続けていた。地元の人々は「もう服は作らないでくれ」と懇願する。「胸が詰まってしまう」と。でもここまでは「絶望の話だが、希望の話をしたい」と中里さん。古着150kgを日本に持ち帰ったのだという。そして、再生技術を持つ会社と契約して、古着を粉々にしてタンパク質の粉末を生産。そのタンパク質の素材で衣服を作り上げることに挑戦。出来上がった服を2023年1月、パリで披露したという。中里さんはこう話していた。「古着を再生したけど価値がないと意味がない。ああいいな、格好いいなとならなければ」「そこがデザイナーの腕のみせどころ」だとも。(筆者補足～中里さんのケニアの旅からパリで発表するまでの過程は、ドキュメンタリー映画「燃えるドレスを紡いで」に描かれています)

さて、最近始めた「ファッション・フロンティア・プログラム」。デザイナーの教育の場とコンテストを合わせた場所を作ろうと3年前から始めたそうだ。葉っぱで作った衣服、端切れで作った衣服など、既成概念にとらわれない衣服が登場。新国立美術館で展示したという。

●永戸考（ながと こう）さん・弁護士（多摩K o l l e c t 法律事務所）が登壇、アメリカでの活動を中心に語る。

アメリカのバークレーロースクールに入所し、このロースクールと提携のある「F B C L C」（地域の公益法律センター）で活動する。

「F B C L C」は、35人程の弁護士が在籍／弁護士数を超える専門スタッフが在籍／年間180人程度の学生を受け入れる／学生の多様性／他の組織との連携などもあり、自由で闊達な雰囲気を感じられた。このセンターには「環境法」「消費者法」「移民法」など8つのクリニック分野があるが、永戸さんは「地域経済正義クリニック」に所属。このクリニックの活動方針は、「訴訟に寄らない方法により、低所得者地域の再開発など、生活条件に関わる問題の根本的かつ持続的な解消を目指す／低所得者による事業・貧困問題に取り組む企業やNPOの法的サポート／法規制や公共事業に対する政策提言／ムーブメント・ローヤリング→弁護士が地域の中に入りながらムーブメントを起こす」。

以上のことを地域住民と共に話し合いながら、地元の市議会議員へのロビーイングも頻繁に行うのだという。そして、実際に取り組んだのが「メジャーリーグのアスレックス球場移転プロジェクト」。市と球団、コミュニティグループの間に調整役として弁護士が入るが、弁護士がメインになるのではなく、グループの利益を考える役割なのだそう。また、「反対するのではなく、参加すること」がプロジェクトの肝だということが言葉のはしはしから伝わってきた。

永戸さんは、アメリカには面白いアプローチがあるんだな、と思っていたが、帰国1年前に「あれ、もしかしたら日の出問題は最先端だったんだ」「日の出問題の活動はロビーイングとか座り込みとかしながら、反対だけでなく環境調査などをしながら20年、30年と粘り強い活動を続けている」と気づき、「日の出問題を再評価し、分析しよう」と考えたのだという。帰国後は、「たまあじさいの会」に協力してもらい、上智大学の学生とフィールドワーク調査を開始。学生からは「ゴミ問題の解決策を考えることが新鮮だった」という声もあったと話していた。

●第2部 次世代対談（中里唯馬×永戸考）

幼少期、日の出の森のトラスト地で遊んだことや強制収用など、当時の思い出話などを話しながら、日の出問題に言及。（以下、筆者要約）

・永戸さん～「日の出運動がここまで続いたのは、楽しいとかワクワクするとか、運動している人は生き生きした感覚があったからじゃないか。裁判に負けても強制収用されても、次の活動に続いていく、どこかで終わったという感覚はなく、モチベーションは続いている。これからは、バークレーのやり方のように、住民、行政、企業の連携が新しい解決の仕方なのでは」

・中里さん～「対立するのではなく、みんなの共通のテーマだから、一緒に解決していくことができるのでは。環境・ゴミ問題に対する意識がこの30年の間に変わってきている」

対談中、中里さんが永戸さんに絶妙の問いかけをした。

「今、課題になっていることはある？」

・永戸さん～「社会の意識が変わっているのに、法律だけが変わっていない！特にゴミ問題では、廃棄物処理の法律。出発点が衛生処理なので、リサイクルの観点がなく、ゴミをきれいに処理すると捉えている。企業の活動の足かせになっている」

・中里さん～「ファッションの世界も法律などで、ブロックがかかりやすい。クリエイター、デザイナー、弁護士が一緒に取り組むことで、意識の変化が生まれるのでは」

★お二人へのメッセージ

中里様 1980年代、パリで穴の開いた服が絶賛されたように、タンパク質素材の衣服を作った中里さんは、この先何十年も語られるデザイナーになると思います。衣服が土に戻るということも斬新です。また、3年前からスタートした「ファッション・フロンティア・プログラム」。何故葉っぱ？と作り手の想いを聴きたくなります。新たな挑戦で未来への希望を見出して下さい。

永戸様 「日の出・三多摩ゴミ処分場」の運動を「最先端」と評価して下さい、感無量です。実にこの運動は多彩な活動を次から次へと展開、「自区内処理を実現する市民プロジェクト」や「日の出処分

場問題解決住民プロジェクト」などは画期的な取り組みでした。「日の出問題の再評価と分析」ができましたら、是非発表して下さい。そして、バークレイ方式で、「駄目な法律を変えちゃおう！」ムーブメントを起こして下さい。